

- 1 単元名 海の中の秘密に近づく読書ノートをつくろう
 教材名「動物たちが教えてくれる海の中の暮らし」他

2 単元について

単元	○文中の大事な言葉に着目し、関連資料を使いながら自分なりの答え方を探す。
目標	○文章の構成を考えながら、要旨を捉える。

本校国語部では、昨年度まで「子どもの“今”からつくることばの学習」をテーマとして、子どもたちがことばへの“感度・理解・拡充”を育む学びの在り方を考えてきた。他者のことばに立ち止まり(感度)、そこに含意されるものを想像したり確かめたりしながら(理解)、自分なりの意味や価値を少しずつ更新していく(拡充)ため、今年度の5年「読むこと」では、各単元で子どもが「選択」することを通して、書かれたことばやその対象を主体的、そして多面的に捉えていく経験を重ねることを意図している。

本単元では、他社の教科書に掲載されている「スカイツリーのひみつ」と比較して、自分がどちらを学習したいかの理由を投票し、学級で扱う教材を決めた。選択の理由として多く挙げられたのは、「海の中のことや生き物に興味がある。はっきりとはわかっていないことを知りたい。」などである。主教材である「動物たちが教えてくれる海の中の暮らし」は、海洋生物のバイオロギングという新しい手法によって、今まで分かっていなかった動物たちの暮らしを捉えられるようになってきたことが書かれている。短い文章ながら、調査結果と筆者の主張が書き分けられるなど、それぞれの段落が役割をもって、意図的に構成されている文章でもある。

子どもたちの選択と教材の特徴を考えると、この教材を通して「要旨を捉える」という目標の他に、「海の中の秘密に近づく」目標を設定する必要がある。そこで本単元での言語経験として、「海の秘密に迫る読書ノート作り」を行う。「難しい言葉・大事な言葉」「筆者の考え」を中心に着目し、それに関わる情報を図書資料や Chromebook を用いて補足して、自分なりの「海の世界への近づき方」を1段落1ページに表現していく。本時は、担当者が作った読書ノートをもとに、その段落に書かれたことばから自分たちの見方をどこまで広げることができるのか、そして、その段落で筆者が伝えようとしていることは何かを共有して、文章構成図を共同製作していく場面とする。

3 学習指導計画(6時間/全10時間)

- (1) 「動物たちが教えてくれる海の中の暮らし」「スカイツリーの秘密」からどちらかを選び、どんな学習ができそうか見通しをもつ (事前・個人学習)
- (2) 初読の感想をもとに、「海の秘密について読書ノートにまとめよう」という学習の見通しをもち、1・2段落の読書ノートをつくって中心文をまとめる。 (3時間)
- (3) 3~9段落を分担し、読書ノートをつくって共有の準備をする。 (2時間)
- (4) ノートの写真をもとに各担当が発表し、筆者の論理展開を考える。 (3時間)
- (5) 学習をふり返って文章の要旨を捉え、学習感想をまとめる。 (2時間)

4 本時の学習について

- (1) 本時のねらい 友だちの発表をもとにことばに立ち止まり、その意味を確かめ合う
- (2) 予想される本時の展開

主な活動と子どもの姿	留意点等
1 本時の学習範囲を音読する	○教科書に引いた線を確認する
2 発表グループの発表を聴く ・3 or 4段落担当グループが、説明文の読みの観点(裏面)に関わる部分を中心に発表する ・文中の言葉と関連資料を関連付けた情報の発表が予想される	○もう少し深めたい言葉があれば、途中で質問してもよい ○必要に応じて、画像を白板に表示する
3 ページの見出しを考える	○短い言葉にまとめることを通して、意味の共有を図る
4 次時に向けた準備をする	○体言止めで終わるように意識させることで、文章校正を明らかにすることにつなげる

【資料】教科の課題とメタ認知スキル・社会情意的スキルとの関連

本校国語部は、国語の特性を、「ことばにこだわって思考し、自身のことばをみがき、ことばの世界を広げることで、自分の考えや思いを深めること」と捉え、子どもの「今」をみとり、次の学びを構想する鍵概念として「感度・理解・拡充」を挙げている。そしてそのルーツは、「他者のことばの使い方に敏感になる」というメタ言語やメタ方法にある。

感度：学習材や他者のことばを介して、ことばに引っかかったり、気づいたりすること
 理解：学習材や他者のことばを介して、そのことばがより深く分かること
 拡充：学習材や他者のことばを介して、私のことばと世界が広がること

生活の中にある文章や友だちのことばといった「他者のことば」を教材とする本校の教科国語においては、以前から「主体的なことばの学びを支える力」としてのメタ認知スキルに着目していたということになる。つまり、本校の国語学習では、自他のことばの使い方に自覚的になっていくことに関わるメタ認知スキルと、言葉表現や非言語表現に内包されている他者の思いを大事にしようとする社会情意的スキルを中心に考えていくことになる。現在のところ、教科国語に関わるメタ認知スキルと社会情意的スキルをこのように整理している。(表1)

表1 国語の学びで育つメタ認知スキル・社会情意的スキル

	メタ認知スキル	社会情意的スキル	みんなでつくる読みの観点 (説明文編)：表2
個による 学びの場面 ↑ ↓ 協働的な 学びの場面	自分の中でのことば 意味や価値を更新する 自分のもので試してみる 問いをもつ・問いかける ことばに立ち止まる 考察する・解釈する ことばの使われ方に気づく 意味や価値を共有する 自分のことばや 思いを大事にする	関係性の中でのことば まねる 一緒に楽しむ 近づくと確かめる よいものを選ぶ 他者のことばや 思いを大事にする	1 難しい言葉・大事な言葉 2 問い・疑問 3 筆者の考え 4 表現の工夫・共感 5 事実・結果 6 つなげる A 本文のことばと B ほかの資料と C 自分の経験と

これまでの部の研究から、「感度」をみがくことを意識して授業を作っていくことが「理解・拡充」の育ちにつながるようになってきた。そこで、子どもたちが主体的にことばの“感度”をみがきあう学習に、教師がどのような役割を果たしていくのが現在の課題になっている。

一人ひとりが自分の読みを表現し、共有するプロセスを繰り返す中で次第に読み方を意識できるようになっていくという考えに立ち、学級で作ってきた「読みの観点」(表2)を意識して自分の選んだ部分に書かれていることの意味をまとめ直し、違う選択をした人に向けて発表する活動を行ってきた。(図1)

本単元ではこのプロセスを、教科書の大事だと感じた言葉(感度)をもとに自分の世界を広げていく活動として、「ほかの資料とのつながり(表2⑥-B)を意識した読書ノートを作って、別の段落を選んだ人たちに説明する」という形で構成した。また、教材の意図でもある「全体から文章の要旨を読みとる」ことに関わって、筆者の考え(表2③)や表現の工夫(表2④)に着目して伝え合うことで「理解のための方法を自覚的に使っていく」という点が、教科におけるメタ認知スキルに関わっている(表2)。

さらに、主観的な「自分の読み」を共有していくことは、それぞれの見方を重ねあわせてその作品の価値を作り出していくことにつながる。「この作品だからここまで読まなければ」とは異なる言語経験を

重ねることが、社会情意的スキルにつながるかと考えている。

